

二〇二〇年度 入学 試験 問題

国語

注意

- 一、解答用紙には受験番号の記入欄が三か所ある。
三か所とも正確、明瞭に記入すること。
- 二、解答用紙には氏名の記入欄が二か所ある。
正確、明瞭に記入すること。
- 三、解答はすべて解答用紙の所定欄に記入すること。
解答用紙の裏面は使用してはならない。
- 四、文字の不明瞭なもの、判読困難なものは、無効とする。
- 五、問題紙の本文は十三頁ある。試験開始後、落丁・損傷がないか確認すること。
- 六、試験終了後、問題紙は各自持ち帰ること。

— 次の文章は、『メディアアコミュニケーション学講義』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

アンドロイドと人間によるパフォーマンス『模像と鏡像——美容師篇』(二〇一三年)は、コミュニケーションとは何かを考えるための興味深い題材になりうる。これは女性型アンドロイド「リプリーQ2」が人間の美容師に髪を切ってもらおう舞台パフォーマンスで、アンドロイドと美容師の会話はすべてアドリブで展開されていく。

このパフォーマンスを見る鑑賞者は、おそらく何らかの違和感を抱くだろう。というのも、アンドロイドの発話はいくつかあるパターンからボタン操作で選択されるため、人間同士の会話であれば起こらないような、融通のきかない(すなわち、「機械的」な)返答が繰り返されるからである。「短めにお願ひします」、「もちろんよ」、「はい」、「うーん」、「冗談です」といったパターンは、どれも美容室での会話において使い勝手がよさそうなフレーズだが、アンドロイドの一辺倒な調子は、しばしば美容師を困惑させる。一般的に話術に長けた職業であるとされる美容師が言葉を詰まらせたり、どぎまぎしたりする様子は、ときに会場の笑いを誘う。

アンドロイド…「休みの日は何をしてるの？」

美容師…「はい……(その質問)二回目ですよね」

アンドロイド…「私、いつも同じこと繰り返し繰り返し言ってるって、よく言われるんですよ」

美容師…「二回目です、それも……」

会場…(笑)

私たちがこのパフォーマンスの会話に感じる「ぎこちなさ」とは、いったい何なのだろう。ここでのアンドロイドと人間のコミュニケーションは、ある意味では成立していないようにもみえるし、また別の意味では成立しているようにもみえる。このパフォーマンスをどう思うかということは、翻って、私たちがコミュニケーションをどうとらえているのかということに通じてい

る。

本章では、右のパフォーマンスを出発点としながら、コミュニケーションとは何かを考えてみたい。まずは、このパフォーマンスを検討するために「線形モデル」と呼ばれる機械論的なコミュニケーションモデルを検討することから始めよう。機械論的なコミュニケーションモデルの限界からコミュニケーションにおける「ふさわしさ」の問題へと視点を移すことで、私たちのコミュニケーションの根拠が実は脆弱なものである可能性がみえてくるだろう。

コミュニケーションを機械の動作に見立て、直線的な流れとしてとらえようとする考え方に「線形モデル」と呼ばれるものがある。このモデルは考案者であるクロード・E・シャノンとウォレン・ウィーバーの名をとって「シャノンとウィーバーのモデル」とも呼ばれる。シャノンとウィーバーがベル電話会社の社員であつたことから予想できるとおり、このモデルは人のコミュニケーションを電話（機械）になぞらえて理解しようとするものである。ここではメッセージを発信者から受信者へスムーズに伝達することこそが目的とされるが、その目的を遂行するためには、妨げとなる「雑音」をできるだけ排除することが求められる。

いまとなつては、このモデルに対する批判的な見解が示されることも多い。当然、人のコミュニケーションは機械のように、リニアに（直線的かつスムーズに）展開されるものではないからである。それは、私たちの日常的なやりとりを思い浮かべてみればわかる。おしゃべりをしているうちに話題がそれて、まったく違う方向へ帰結することもあるし、相手の誤解が思いもよらない展開をよぶこともある。人間は機械とは違ってもつと柔軟で自由がきく、と感じる人は多いはずだ。

ここで冒頭のアンドロイドパフォーマンスの例を思い出してみよう。もし線形モデルが示すようにコミュニケーションを「円滑な伝達」という目的達成の側面からのみとらえるのであれば、先のパフォーマンスにおけるアンドロイドと美容師のやりとりはある程度「正しいコミュニケーション」であるとされるだろう。なぜならば、あのパフォーマンスのなかで、アンドロイドは「髪をカットしてもらおう」という目的を達成している（美容師の「どうします？」という問いかけに、「短めをお願いします」という注文をし、その結果として髪を短くすることができた）からである。たとえアンドロイドと美容師の会話がどんなにぎこ

ちないものであっても、目的が達成されているかどうかを重視する——それが線形モデルの考え方なのである。

とはいえ、あのパフォーマンスに違和感を抱く鑑賞者は、「髪をカットしてもらおう」という目的が達成されたか否かを問題としているわけではない。おそらくは、質問に対する通り一遍の返事や、「余白」や「遊び」のない会話を問題としているのである。それは、言い換えれば、その場の雰囲気に対する「ふさわしさ」が不足していることへのもどかしさなのかもしれない。ただし、この「ふさわしさ」からコミュニケーションをとらえようとする視点に対しても批判的な検討が必要となる。以下では議論をさらに一歩進めて、人間らしい「自然」なコミュニケーションの条件とされる「ふさわしさ」が、実は恣意的なものにすぎないことを明らかにしていこう。

コミュニケーションを「ふさわしさ」からとらえようとする考え方は、多くの人に抵抗なく受け入れられている。たとえば、私たちが「人間は機械とは違ってもつと柔軟で自由がきくものだ」と語るとき、その背後には、人間のコミュニケーションはその場に適した「ふさわしさ」をふまえたうえで展開されるものだ、という確信が透けてみえる。昨今、とくにそれは「コミュニケーション能力」という尺度と結びついて、「その場にふさわしい対応」ができればコミュニケーションの目的が達成される(Spitzberg & Cupach 1984)、^cという等式を導き出している。

しかし、ここでいう「ふさわしさ」とは、いったいどのように決められたものなのだろうか。あらゆる場面における「適切な」行動は、法律で定められているわけでも、マニュアル化されているわけでもない。いってしまえば、私たちの「合意」によって成り立っているのである。「空気を読む」というコミュニケーションがときに私たちを苦悩させるのはそれゆえである。「空気」は誰かの一言で一変することもあるし、そもそも「空気」は「読む」(あるいは、みんなが読んでいるフリをする)ことによって初めて存在可能になるからである。

ここでいまいけど、冒頭のパフォーマンスの例に戻ってみよう。アンドロイドと美容師のコミュニケーションは「髪をカットしてもらおう」という目的を達成させてはいたものの、そのやりとりには会話の「遊び」や「余白」、すなわちその場の文脈を考慮した臨機応変さや柔軟さが不足しているとも考えられるのだった。たしかに、意図の異なる複数者の問いかけに対して同じフレ

ーズを使いまわすアンドロイドの返答は、まさしく機械的である。普通、会話のラリーをつづけるには、聞かれた質問に答えるだけではなく、相手にパスを投げ返す態度が必要である。しかし、アンドロイドにあらかじめ用意されたフレーズは、次のパスを繰り出す余地をもたない。あるいは、用意されたフレーズのなかに質問文（大勢の人の前で髪の毛を切るのつて緊張しない？、「休みの日は何をしてるの？」）があつたとしても、それは直前の話題に関連づけられたものではない。

むしろ興味深いのは、アンドロイドの機械性をフォローしようと努める美容師の振る舞いである。アンドロイドの一方的な投げかけに対して、美容師はそのごちなさにツツコミを入れたり、それを笑いに変えたりしながら、そこで展開されるやりとりを、よりパフォーマンスらしくみえるものへと転化させているのである。

ところが、パフォーマンス中盤になると美容師は「何て言ったらいいのか……」と何度かつぶやく。これが示唆するのは、相手との合意や共有がなければ、その場の「ふさわしさ」や「適切さ」や「空気」を維持することは難しい、ということである。あるいは、相手の態度によって、その場の「ふさわしさ」や「適切さ」や「空気」は変わりうるということである。

パフォーマンスの例が示すように、「ふさわしさ」に依拠したコミュニケーション観は、実のところ機械論的なコミュニケーションと似たような構造をもっているのかもしれない。というのも、巨視的にみれば、「ふさわしさ」を求めるコミュニケーションも、所詮は「ふさわしさ」という大きなフレームのなかで、目的を定めてそれを達成するという流れを維持しているからである。

これまでの議論をとおして、私たちはコミュニケーションをどのようにとらえ直すことができるのだろうか。多くの人にとつてコミュニケーションとは「自分の考えを相手にうまく伝えること」とか、「相手と意思疎通ができること」と信じられている。これは辞書的な定義——コミュニケーションとは「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと」(大辞泉)——にも示されるとおりである。あるいは、コミュニケーション (communication) という言葉がラテン語の「共通の (communis)」とか「他の人びととわかちあう (communicare)」といった言葉に由来することを想起すれば、コミュニケーションという言葉自体がすでに「意思疎通」や「共有」といったことを含意しているともいえる。たしかに、「伝える」という目

的が確実に達成されるほうがコミュニケーションをする甲斐がある、と感じられるのかもしれない。

しかし他方で、コミュニケーションはいつでも「伝わる」わけではないし、いつでも「わかりあえる」わけでもない。むしろ私たちのコミュニケーションはつねに「うまく伝わらない」、「わかりあえない」可能性をもっているといってもよい。考えてもみれば、コミュニケーションが思いどおりにいかないことなど「 」である。たとえば、何気なく発した冗談が誰かを傷つけてしまったり、誠実な気持ちを伝えるはずの言葉が皮肉ととらえられてしまったりすることがある。あるいはもつと極端な場合、自分の発したメッセージが聞き入れられなかったり、無視されたりすることもあるだろう。言い換えれば、コミュニケーションは予期せぬ「雑音」にさらされたり、「ふさわしさ」が共有されなかったりする可能性に満ちているわけだ。

a、「コミュニケーションがうまくいかなかった」と嘆きたくなるような状況であったとしても、それが「コミュニケーションの不成立」であるとは必ずしも言い切れない。たとえば意図していたとおりの伝達がおこなわれなかったとしても、そこに生じた誤解や勘違いが自分のメッセージに対する相手の反応であるという点では、そこに何らかのコミュニケーションが生じていることに違いはない。あるいは、自分のメッセージに対する無視（反応しないという反応）もまた、「私はあなたを無視している」というメッセージの表れであるという点では、立派なコミュニケーションであるといえるだろう。そのように考えれば、いついかなる状況においても「人はコミュニケーションしないわけにはいかない（One cannot not communicate）」（Watzlawick et al. 1967）のである。自分や他者の存在自体が何らかのコミュニケーション・メッセージになりうるといってもよいだろう。

ところで、b「うまく伝わらない」、「わかりあえない」可能性を完全に排除することができないのだろうか。それは、コミュニケーションには「解釈」がかかわっているからである。あるメッセージに対する意味の取り違えは、そもそも自分の解釈と他人の解釈が異なることによって生じる。そもそも物事に対する解釈は一つではないということを考慮に入れておけば、自分の意図が相手にすんなりと伝わること自体が珍しいことに思えるし、自分の意図と相手の解釈が厳密に一致することなどないようにも思える。

先述の線形モデルでは、コミュニケーションとは送り手と受け手のあいだでメッセージが直線的に伝達されるものである、と想定されていた。

c、雑音さえなければ、メッセージは発信者の意図どおりに伝わるというのである。だが、この場合、メッセージの受け手を受動的な存在としてイメージすることに問題がある。仮に雑音がなく、メッセージが直進したとしても、受け手の受け取り方（解釈の仕方）によってメッセージの意味は変わりうるからである。それは、コミュニケーションにおけるメッセージの意味が送り手の側によつてのみ決定されるのではなく、受け手を含めたコミュニケーション過程のなかで生成されていくものであることを示唆している。

ただし、いくら受け手に解釈の余地が与えられているからといって、その解釈は受け手の勝手気ままなものではありえない。というのも、メッセージの意味解釈は、少なからず社会的なコードの制約をうけているからである。ここでいうコードとは、メッセージを解釈する際に参照される規則（あるいは、取り決めといつてもよい）のことである。コードは通常、特定の社会や文化のなかで共有されており、私たちはそれを慣習的に身につけている。たとえば、ある社会や文化のなかで、特定の言葉が同じ意味に解されるのは言語的なコードが共有されているからであり、特定の仕草が同じ意味に解されるのもまた文化的なコードが共有されているからである。これらのことをふまえると、コミュニケーションはコードの制約を受けつつ、その範疇でつねに解釈のせめぎあいに行われている、と考えることができる。

本章では、アンドロイドと人間のコミュニケーションという、少々特異なコミュニケーション状況を検討することで、私たちがあたりまえのように思っているコミュニケーション観をとらえ直そうと試みてきた。コミュニケーションとは、機械論的コミュニケーションモデルが想定するような目的達成だけを指すものではないし、「ふさわしさ」に依拠したコミュニケーション観が想定するような適応性の発揮だけを求めるものでもない。そもそも情報伝達や意思疎通が「うまくいく」ということだけがコミュニケーションではなく、「うまくいかない」ことも含めてコミュニケーションなのである。

（堀幸枝「人間にとってコミュニケーションとは何か」

設問

(一) 空欄 a } c に入る語句として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- 1 つぎに
- 2 つまり
- 3 あえて
- 4 しかし
- 5 やがて
- 6 なぜ
- 7 すでに

(二) 空欄「」に入る語句として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 五十歩百歩
- 2 出来不出来
- 3 日常茶飯事
- 4 自転車操業
- 5 古今未曾有

(三) 傍線——A「何らかの違和感」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 美容室での会話において使い勝手がよさそうなフレーズを、アンドロイドが舞台で話すことへの違和感。
- 2 融通のきかないはずのアンドロイドが、美容師とすべてアドリブで展開していく、流れるような会話への違和感。
- 3 一辺倒な調子で発話するアンドロイドと、どぎまぎしながら返答する美容師が交わす、ぎこちない会話への違和感。
- 4 話術に長けた美容師が会場の笑いを誘うようなアドリブで、アンドロイドの言葉にうまく返答することへの違和感。
- 5 コミュニケーションが成立していないにもかかわらず、アンドロイドと美容師が困惑せず会話を展開することへの違和感。

(四) 傍線——Bについて、「線形モデル」と呼ばれる機械論的なコミュニケーションモデルの説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 発信者から受信者へメッセージが直線的に伝達されることでコミュニケーションが成立するととらえたもので、電話における日常的な会話を基に考案されたコミュニケーションモデル。
- 2 問いかけに応じて直ちにパフォーマンズを選択するという機械の動作にコミュニケーションを見立てたもので、リニアに展開すると理解されたコミュニケーションモデル。
- 3 直線的な流れとしてコミュニケーションをとらえたもので、「余白」を会話から取り除くことでかえって受信者に誤解を与えやすくなった、限界のあるコミュニケーションモデル。
- 4 話題がそれて違う方向に進むことがあっても、発信者から受信者へ最終的にメッセージが伝達されれば「正しいコミュニケーション

ケーション」となるととらえたもので、結果に重きをおいたコミュニケーションモデル。

5 「円滑な伝達」という目的達成を重視し、目的を遂行するための妨げとなる「雑音」をできるだけ排除することをコミュニケーションにおいて求めたもので、電信電話会社の社員によつて考え出されたコミュニケーションモデル。

(五) 傍線——Cについて、「ふさわしさ」が「恣意的なもの」であるとはどういうことか。適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 意図の異なる複数の問いかけに対して「空気」を読み柔軟に対応するフリをすることによつて、私たちはマニュアル化されていない会話を成立させているということ。

2 相手との合意を確認しながら「適切な」やり取りをしているという点で、私たちの会話は機械論的なコミュニケーションと似た構造であるということ。

3 「コミュニケーション能力」という尺度があるため、私たちは「空気」を読み、文脈を考慮して臨機応変に会話を成立させているということ。

4 会話のラリーをつづけるには、聞かれた質問に答えるだけではなく、パスを投げ返す態度が必要であり、相手の態度によつてその場の「空気」は変わりうるということ。

5 あらゆる場面における「適切な」行動は法律で定められているわけでもないのです、私たちは自由に自分の目的を達成させるための会話を行っているということ。

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

1 『模像と鏡像——美容師篇』で展開される会話の中で、「リプリーQ2」は自分がいつも同じことを繰り返しているということ、を、繰り返して言った。

2 アンドロイドと美容師の舞台パフォーマンスでは、「休みの日は何をしてるの?」という美容師の問いかけに対して、アンドロイドはすぐに答えていた。

3 私たちは美容室で髪をカットしてもらうことを目的に美容師に返答するが、舞台におけるアンドロイドは鑑賞者を楽しませることを目的に返答している。

4 美容師とアンドロイドの舞台パフォーマンスの鑑賞者の多くは、「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと」という意味のコミュニケーションのとらえ方に違和感を持っていた人びとだった。

5 コミュニケーションの由来であるラテン語の言葉 (communicare) の意味するところは、コミュニケーションの辞書的な定義と相反するものではない。

6 アンドロイドと美容師の舞台パフォーマンスを契機に、私たちがあたり前のように思っているコミュニケーション観に対して、筆者は疑問を抱くようになった。

(七) 傍線——について、筆者は「コミュニケーションとは」どのようなものだと考えているか、説明せよ(句読点とも四十字以内)。

(以上・九十点)

二 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

田舎ほとりの一座は、昼つかたに過ぎ、遅きは未の刻などに退散す。これよりいささかも時移り侍れば、道ならぬやうにつぶめく人侍り。いかさまにあるべきやらむ。

人の語り侍りしは、二条の太閤さまなどのやむごとなき御一座は、毎々朝より深更におよび侍りしとなり。そればかりこそ侍らずとも、朝天より日晡にいたらざらむ一座は心にくくも侍らず。さやうにあはあはしく、満座の心をも恥ぢず申しつけ侍る人は、「沈思してもいかばかりのことか侍る。としまかうざま案じたるもおなじことなり。沈思の人の句、なかなか心を得ず」など申し侍るなり。言葉は心の使ひと申せば、これらの人の胸のうち、つたなく、さわがしくこそおぼえ侍れ。

秀逸と申せばとて、あながちに別のことにあらず。心をも細く艶にのどめて、世のあはれをも深く思ひ入れたる人の胸より出でたる句なるべし。されば、一字二字のかはりなり。しな・いう・たけ・やせ・さむく・らうらうしく、いはぬ心の句ひあるは、閑人の口より出づるものなり。後京極撰政御歌、

人すまぬ不破の関屋の板びさし荒れにしのちはただ秋の風

この「ただ」の二字は、昔より玄妙不可説のことに侍るとかや。かのかしこき和尚も、「誠におきがたきことなり。かの御胸にありけることよ。あな恐ろし」など仰せ給ひし。さては、迷へると悟れるとのさかひなり。堪能の人の句は、心とらけて、胸より出づるゆゑに、時もうつり日も暮れて侍るにや。不堪の人の句は、舌の上より出でぬるゆゑに片時なるらむ。劫は入りて耳はなきゆゑに、達者にのみなる人おほしとなり。

(心敬「ささめごと」)

注 一座 和歌の上の句と下の句を二人以上が交互によむ連歌を行う集い。

二条の太閤さま 二条良基のこと。

日晡 日暮れ。

しな・いう・たけ・やせ・さむく・らうらうしく 品位や風格、趣など、歌を評するときを使う用語。

和尚 歌人、正徹のこと。

劫は入りて耳はなき 長年にわたって経験を積んでいるだけで、鑑賞力がない。

設問

(一) 傍線 a・b の意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a	あながちに	b	かしこき
1	おりしも	1	尊敬すべき
2	まだしも	2	身分が高い
3	必ずしも	3	弁が立つ
4	もしも	4	頑固な
5	少しも	5	心やさしい

(二) 傍線~~~~~ア・イの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

ア 沈思の人の句、なかなか心を得ず

- 1 ゆっくり工夫を重ねる人がよむ句は、かえって気に食わないものだ
 - 2 あれこれ迷う人がよむ句は、かえって情趣に欠けているものだ
 - 3 思い込みが激しい人がよむ句は、とうてい道理が通らないものだ
 - 4 しつかり考える人がよむ句は、かえって意味が分からないものだ
 - 5 心に悩みを抱えた人がよむ句は、とうてい気持ち伝わらないものだ
- イ これらの人の胸のうち、つたなく、さわがしくこそおぼえ侍れ

- 1 連歌を軽んじて和歌ほど丁寧に作らない人の心の中は、風雅の心を解さず独りよがりなものだと思われま
- 2 地方の一座に連なつて他の人を馬鹿にする人の心の中は、都の一座に憧れていて軽々しいだけだと思われま

- (三)
- 3 一座の人々の気持ちをばからず軽々しく批判する人の心の中は、浅はかで落ち着かないものだと思われれます
 - 4 高貴な一座に場違いにも招かれた田舎の人の心の中は、身分の軽さにいたたまれないことだろうと思われれます
 - 5 連歌を始めて日が浅く句をつける間の悪い人の心の中は、上達しないことに焦っているだけだと思われれます
- 傍線……………「されば、一字二字のかはりなり」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 筆者は、「人すまぬ」の歌の「ただ」の二字は、和歌に使うべきではない俗語だと批判する正徹の言葉を引用して、有名な歌人でも気のゆるみで一字二字の間違いを犯すと注意している。
- 2 筆者は、「人すまぬ」の歌を引用し、誰も思いつかないような発想で「秋の風」を強調する「ただ」を使ったことに注目して、歌は一字二字が肝要であると力説している。

- 3 筆者は、「人すまぬ」の歌で、秋の風景を哀愁に満ちたものに一変させている「ただ」に注目して、良い歌は一字二字を入れ替えるだけで様々な風景を描写できると賛美している。

- 4 筆者は、「人すまぬ」の歌は、「ただ」の二字によって不吉な歌になっているという正徹の言葉を引用して、歌は一字二字を選び間違うと道を外れたものになると警告している。

- 5 筆者は、「人すまぬ」の歌を引用して、左遷された人の名前「ただあき」が掛けられていることを例に、歌には世を憂う気持ちが一文字二字でも込められるべきだと主張している。

(四) 傍線……………「いたらざらむ」の「む」と文法的意味・用法が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 いかにもあれ、たよりあらばやらむとておかれぬめり
- 2 いづちいぬらむともしらず
- 3 世に仕ふるほどの人、たれか一人ふるさとに残りをらむ
- 4 それを取りて奉りたらむ人には、願はむことをかなへむ
- 5 いかばかりかは恨めしと思ひつらむ

(五) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 筆者は、二条良基の一座が夜中まで連歌を行ったということを人から聞いた。
- 2 筆者は、二条良基の一座のあり方を批判している。
- 3 とりわけ優れた歌は、世俗の雑事に煩わされない人がよんだものが多い。
- 4 後京極摂政という歌人の素暗らしさを、誰も言葉であらわすことができなかつた。
- 5 朝早くよんだ句より日暮れによむ句のほうが優れている。
- 6 舌先から出る句は瞬時にその良さがわかる。

(六) 傍線——について、筆者はどのように「あるべき」と考えているか、説明せよ(句読点とも二十字以内)。

(以上・六十点)